

Title	聖学院大学 人文学部 欧米文化学科 公開講演会報告
Author(s)	木村, 美里
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.25No.1, 2015.9 :56-57
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5423
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

聖学院大学 人文学部 欧米文化学科 公開講演会報告

2015年1月14日（水）聖学院大学チャペルにおいて、欧米文化学科の公開講演会が開催された。葛城崇氏（文部科学省初等中等教育局国際教育課英語教育プロジェクトオフィサー（楽天株式会社グローバル人事部副部長））をお招きし、「『英語』が教えてくれたこと」と題して、ご講演いただいた。講演内容は以下のとおりである。

<楽天「英語公用語化」プロジェクト>

楽天の「英語公用語化」プロジェクトは、①職場全体で取り組む、②ネイティブレベルは目指さない、③英語が苦手な人を温かく応援することをポイントとして実施されている。具体的な内容は会議や朝会の英語での実施、書類の段階的な英語化、TOEICスコアの昇格要件への導入、成功例・学習方法の共有などである。プロジェクトの主な効果は、これまで通訳・翻訳を通して意思の疎通を図っていたことが、直接コミュニケーションをとれるようになったことであり、コストと時間の削減にもつながった。また人材の採用・育成・配置の面でもグローバルレベルで行えるようになった。

楽天ではTOEICを導入しているが、TOEIC＝英語が話せるようになるとは考えていない。しかしながら、TOEICの学習を行うことで、①スキルの可視化、②モチベーションの維持、③基礎力の強化につながることへの一方法として使用している。実際にビジネスで使用される単語やフレーズはTOEICから学ぶことができ、ビジネスの場で役に立つ。

<英語の重要性、グローバル人材の育成、今後の英語教育の動向>

現在、世界の地域別GDPのシェア予測をみると、GDP全体は伸びており、その中でアジアの伸び率が高くなると予想されている。この結果にもかかわらず、日本のGDPは下降すると予測されている。

人口の減少が進む日本は、グローバルビジネスに係らざるを得ず、グローバル人材の育成も求められる。しかしながら現状は、将来の英語の重要性は認識されながらも、多くの人々が会社で英語を使用する機会がない。

それでは日本の教育制度はよくないのか。葛城氏は日本の英語教育が悪いのではなく、他の国々の英語教育方針が進んでいるため、差が出てしまっている現状を語られた。日本はアジア圏のTOEFLスコアや世界の大学のランキングで順位が低く、海外留学者数も減少傾向にある。そのため日本人の海外留学促進イベントの開催や支援が行われている。

さらに大学入試での英語4技能の実施に向けての課題についても触れられた。小学校から高校までの授業と大学の講義自体は原則4技能（聞く・話す・読む・書く）を教えている。しかしながら大学入試はリーディングとリスニングのみで実施され、リーディングが出題の大半を占める。この結果、高校では途中から入試対策としてリーディングに時間を割かざるを得ない。大学側では4技能を取り入れた入試を行う希望はありながらも、大学のみでは実践できない現状を抱えている。この課題については今後も文部科学省の有識者会議などで協議されていくとのことである。

<英語が教えてくれたこと>

葛城氏は英語が苦手な人の主な特徴について2点挙げている。第1点目は、「ボキャブラリーの欠如」である。英語は言語であるため、単語を知っていれば知っているほど、英語への理解度が増す。これに対して単語を知らないと、理解度も低くなり、英語が苦手・嫌いになる。

第2点目は、「中学英文法の欠如（特に2・3年）」である。英文法の基本は、中学の時に学ぶ。この中学英文法が分らないと、その後の英語学習も理解できず挫折する。結論として、この2点につ

いて対策を行えば、英語への苦手意識の克服につながる。

また自身の英語学習から「夢・目標・計画」の必要性を挙げており、夢の実現のためには「目標」と「計画」が大切であると述べられた。英語学習における成長はすぐに結果が出るものではない。はじめ成果の見えない平坦な学習プロセスを経て、急激に英語力が伸びる時期があり、また平坦な道のりとなる。そのため成果が出ないからといって、あきらめてはならない。この成果が出る前の過程で学習をやめてしまうと、英語への苦手意識をもつことになるからである。英語は自分の可能性を広げる道具であり、英語を習得することによって、キャリアも広がり、自分の成長につながるのである。

最後に葛城氏はチャールズ・ダーウィンの言葉「最も強い者が生き残るのではなく、最も賢い者が生き延びるのでもない。唯一生き残ることが出来るのは、変化できる者である」を引用して、講演

を終えられた。

<所見>

楽天の「英語公用語化」プロジェクトは、英語を使用する機会を増やし、会社全体が協力し合って達成したものである。成功の背景には、最後まであきらめないという熱意のもと、多くの学習方法を実践し、失敗を経験しながらも継続してきた過程がある。葛城氏はこれからのビジネス社会において、英語が今以上に必要となることを強調されていた。それゆえに社会人となる前の段階で、英語学習に対して「変化できる者」となれるかどうか、その後の進路を選択する上で重要になるといえよう。

(文責：木村美里 [きむら・みさと] 聖学院大学基礎総合教育部特任助手)



講演者：葛城崇氏